

## 表紙, 目次, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38631">http://hdl.handle.net/2297/38631</a>

明治三十七年六月二十三日發行

# 十全會雜誌

第三十四號

（非賣品）

全澤醫學專門學校十全會

# 十全會雜誌第二十四號目次

○原著及實驗 ..... 一頁

○鼻病ヲ論ズ ..... 特別會員 本田三郎

○糖尿鑑識ノ一法タル Phenyl-hydrachprobe. .... 特別會員 島田吉三郎

○死後八週(?)ヲ經テ娩出セル女性胎兒ノ一例 ..... 特別會員 八田智証

○漫 錄 ..... 三一頁

○藻鹽草 ..... 風 山 兒

○閑筆 ..... 兩 橋

○支那醫界之前途 ..... 支那留學生王建著

○會 報 ..... 三七頁

○人事彙報○第三十一回講談會○第三十二回講談會○弓衛部春季競射會○十全會講話部第三回總會○雜誌部雜報・圖書の購求・石川教授の寄贈・高安博士祝賀會の寄贈・有壁一雄君の退校・上野忠君の雜誌部委員再任第三十四號編輯會○千葉醫學會雜誌休刊○小西俊三氏へ寄贈○山崎教授歸校式○山崎教授の歡迎會○本學年の科業終了○提灯行列○下平教授の寄贈○入學志望者○本校入學者休格檢査及選抜試驗○同窓大懇親會及圖書寄附

○通 信 ..... 五一頁

○清水齊雄君

○會 告 ..... 五二頁

○廣 告

○寄贈及交換書目(其一)○寄贈及交換書目(其二)○十全會會費領收  
○同窓懇親會計報告

●期滿ち〓任了へ將に去らんとす●

回顧すれば。生等。任を本兒保育の要途に漚してより。止まること一歳。誌の成るもの五。然れども未だ其責を十全し。以て。諸賢に應ふるものふく。衷心。ひそかに愧羞に堪へず。今や。筆を擱き去るに。臨んで一言を呈し。會員諸彦の寛恕を冀ふと云爾

●六月 編輯子誠す●

漫 錄

○ 藻 鹽 草 風 山 兒

Pythagoras は Silence is better than unmeaning words. と説く又 Be silent, or speak something worth hearing. と云ふ English proverb もあるから僕は今迄沈黙主義を取つたが雑誌部委員から何でも平素感して居ることがあつたら投書せよとの話もあり又 A barking dog is more useful than a sleeping lion と云ふ話もあるから僕もほんの出鱈目を書き并べて諸君の笑草に供するとした

○ 本誌前々號所載の交友茶話に於て無菌生が獨乙語の必要を説いた文中「凡る語學之早期に限るよ毎朝卅分位宛でよいから熱心に規則正しくやつて見給へ云々」とあるが僕は大に賛成だ朝の時間の貴ぶ可く價值あること An hour in the morning is worth two in the evening. 又と The morning hour has gold in its mouth. と云ふ英諺でも知ることが出来る滿校學に忠るる諸君よ毎朝少し我慢して Frühl aufstehen して一意専心獨乙語をやつて見給へ斯學の進歩發達は實に大なるものだろー是法によつて吾々は Franklin の云つた通りに wise となり且て health

を保つことが出来るだろー

藝妓に三味線兵士に銃砲が必要無く可からざる如く吾々醫學生には獨乙語は unentbehrlich である或人々獨乙語の讀めないものは廿世紀の醫者たる資格がないと云つたのも強ち過言でもあるまい是の必要不可缺的の獨逸語が我校に於て微々として振えないの如何う云ふ理由だろーか其の Aetiologie と代數學の多元多次方程式の根と同様只一つではない必ず數多の源因があるや即ち専門醫學研究の多忙、語學授業時間の僅少、學生大部分の斯學不熱心(勿論一部分非常に熱心な人あるけれども)等は原因中の主なるものだろー併し僕は尙一の大なる源因が潜伏してあると思ふ其所で Was ist das? なる Frage を發せられると明答するとは少々憚るが諸君は自ら容易く此の方程式の根を見出すことが出来る、否既に此根は解明されてあると信ずる、兎に角我校獨乙語界の寂寞は大に悲む可きとではないか。苟も他日刀圭界にさる人あざと知らんとを期する青雲の士に僕と切に忠告する蹶起奮勵以て語學を修めよ勤勉せよ忍耐せよと僕の此忠告が御氣に召さん人は乞ふ次の句を誦し給へ

Advice is seldom welcome, those who need it most like it least. (Johnson)  
Patience is the key of content. (Mahomet)

At the bottom of patience is Heaven. (Borren)

Advice is not what is most pleasant, but what is most useful. (Solon)

○茲に僕が大にキャンンたらざるを得なかつた一事を一  
寸紹介しよー其れは昨年夏休み中の出来事であつた某港  
へ獨逸軍艦が入港したので僕は一友人を誘ふて見物も出  
かけた處が是の友人はさも愉快さうに得意になつて流調  
な Conversation をやるので僕も瘦我慢を出して少し話し  
かけたが毛唐の語に所々判らないところがあるので慙愧と殘  
念の情に堪へなかつたけれども僕の時々 Ich kann nicht  
verstehen. Bitte sagen nochmal をやらざるを得なかつた  
之れにはいくら負け嫌ひの僕も大にキャンンだつた  
のである

僕はどーしてろんなに巧く會話をやる様になつたかと  
尋ねたら彼之氣焰万丈と云ふ元氣で斯ー云つた「ナニ  
君、僕は君の知つたる通り中學時代には語學は一番嫌だ  
つたさー處が某校へ入つたら獨逸語の教師が非常に嚴重  
に單語文法會話暗誦等をびし／＼やらせるので始めのう  
ちは大に閉口したが仕方なしに文法書に嚙ぢり付き字書  
と首つ引してやつて行つたさ併し其中に獨乙語の力もつ  
き自然に興味を感じて來る様になつたので益勉強し今で  
は語學が一番好きになつてねー螺法ではないが獨逸會語

なんかも一通りはやれる様になつたよ」と彼は尙ほ語を  
讀けら云ふ様

「ナニ君中學時代の英語教師が今少し嚴格にやつて呉れ  
たんだつたら英語の會話も少し位はやれるだろーと思ふ  
に怨むらくはどーも教師が餘り寛大呑氣過ぎたからな  
と」僕は彼を責めて云つた

Anderson は云つたじやないか

Nuts are given, but they are not cracked.

と中學時代には英語の時間は充分あつて所謂 Nuts の與  
へられて居つただから君が其時勉強して Nuts を cracked  
すればよかつたのだ其れに罪を教師に歸して怨むなんて  
我田引水も實に甚だしいじやないかと 我友之辨解して  
云つた「成程さう君の様に眞面目に云はれれを一言もな  
いが併し君學生と云ふものは兎角遊びたくつて仕方いな  
いものだからねー其れを教師が嚴重にやつてころ始めて  
普通に勉強するんだもの、ろれに教師迄ずけた日みや  
堪つたものじやないよ」と僕は彼の辨解もあながち一理  
なきにも非ずと思つたので之で攻撃を止めた

○中學時代のとを書いたので思ひ出したところあるから一  
寸書かふ其れは僕が中學にありた時、或教師が可なり重  
症の脚氣に罹つたので當時未だ其の例か少ないのに拘は  
らず人力車を驅つて登校し小使の肩に寄り Schleppe して

つゝ辛じて教室へ来て講義された之を見兼ねた生徒の或る一人と先生の病氣が輕快する迄欠勤して自宅にて充分に静養されんとを乞ふた、時に先生と容を正して斯う云

いれた  
「教師の僅々一日の欠勤は生徒數百日の欠席に當るから」

と先生が此語を聞きて僕等と感謝の涙に洩んだのみならず今尙ほ其徳を景慕するのである僕と獨逸語又は臨床講義等の時間又は語を思ひ出して思はず長恨大息するところが屢ある餘りつまらないとを長く書いて貴重な雜誌のペーシを占領するのは恐れ多いから僕は Benjamin Franklin の云つた一余言を以て筆を擱かう

Nothing excuse of unpunctuality. (完)

## ○ 閑 筆

(一) 砂上の記 雨 橋

四月二日、金石の波打際を千鳥の様に足跡つけし男五人ありき、何れも黒洋服、黒帽子といふ打装なれど、鶉の眞似も出来兼ねる輩なるべし。吾の此處へ來しは之れにて三度目なれば、四邊の風物既に親しきまゝ、珍らしう覺ゆまじと、燈臺の立てる砂丘を上る時は思ひたりしも、次第又現とれきたる水限線の、空と別ち難きまで打ち霞

みつゝ、霞の奥の奥の霞に、船幾點の夢と許りや、餘りに和らぎたる海のおもては、懐かしうも坐る南海の岸の浮べられて、蒼茫の遠かたに、憧るゝ塵の子の胸も諍けく、左右前後の空間を獨り占めて、吾が脚の立つ此の土は、幾億万の人間が、生れ死に、喜び悲しみ、争ひ闘ふろれるなるやを疑ふまで、砂上の吾のけに聖かりき。

乾きたる砂に五人と相坐しつ。

波の花の、寄せては碎け、碎けては散り、眞砂を洗ひ貝を動かし、初初の朝より無限の過去を無限の未來まひく可く偉大なる「働き」のモデルの前に、弱く力無き人の子は、小さく落つる吾が影を哀み、酸氣を含む洋風を襟に入れて、恍然として心の行衛を忘れたりき。

雪の如く眞白なる鷗一羽飄として顯れ、吾等が前を過ぎて遙かになり行くなべに、軀は點の如く翼は上下に弓形の線となり、やがては能登の岬の膝々たるのみ、望み空しく迷ひ了んぬ。

鳥の影の失せし時、船路の跡の絶えし時、何とは知らず人生の儂なさを覺へて、永遠に留む可き吾が生の刻印を、奈何にしてかほと思ひ回らすも、甞だ昏うなりまさる夕野の末の、覺束なさは彌や一步と深ふなりて、自らだにも認め難き吾が姿、噫!! 大事業も何ならず、不可能と何ならず。

今ひき上げし網の目に残る小魚を桶にとりて、十三許りの娘の、背に幼さを負ひ弟と手を結びて嬉し氣に急ぐ、此處よ生ひ此處よ終る、自然の運命と境遇とに左右せらるゝ渠等は、羨まるゝ可きや、將た、何をか羨む可きや？天巧の讚美に、人黙し、吾黙す、靜かなる世にも有る哉。霞は時と共に退き、空は群青の匂ひが深かる。

嗚呼これ、暖き血と、戀の誠の榮ゆる、南獨逸の餘に髣髴たらずや。

人間の義務を道るは稚、宗教の慰安を説くは稚、而して吾れ何物をも思はず考へず生ける屍なりと笑ひしは、稚なりけむ。

親しき限りの吾等五人、心ごゝろに歌ひ語りつ、何時までも青海白砂の好ましけれど、河北瀉の勝に飢ゆる久しければと、二人起ち、二人起ちて、五つの面々北に向ひぬ。

### (二) わが宿の記

木枯と主馬町の寂寥、水音は十三間町の四疊半に飽きて、此の寓に移りしは、ことし三月一日なり。

鬼もこぬ扉のかはらを南に一町ばかり、泉野神社を前にしてくるしき時の頼みもよく、裏合せに寺と續きて成佛の縁に漏るまじかめり。

疊いさゝか参りて塵ほどの心配も拂はず、天井低うして謹慎の美德を養ふ、窓を押せば神苑の大榎は若葉の匂ひ

涼し氣に天を隠し、雀巢風を憂へず、休齋楯に威あり矣。足袋屋は前にあれど未だ履き倒したることなく、目前に密柑の山はあれど羽化訪問の榮に接せず。

此室の主人、人間半生をのらりと暮して、たい夜の明けやすきと驚く、然れども、袂の塵に一片の落英はあり。

### (三) 喪家の狗

喪家の狗あり。

吾が近傍を假りの宿として食を拾ひ歩りく、肉落ちて骨あらはに、四脚枯折、背毛離脱、汚穢警へむとするに難し、紫斑傷痕、濃汁固血、見るからにわが眼は神經を激して顔を掩はざらむも得ず。

あゝ哀れなる狗、ろも何處より、何なれば此處へは迷ひ來つるや!!

生れにけむ宿のあるじの無情よりか、自ら好むで留るなるか、養ひ難しとて捨てたるや、用なきが爲めに捨てにしゃ、今を去る二月、泉野神社の榎の柵に荒縄もて結びありしとどか。

未だ生れて程なき身の、時に雪降る晩冬の冷風に浴しては、温き臥床乳房もなきに、夜すがら泣きて泣きてけむ、圓かなる夢破られし人の、さすがはれと繩解さしあした。

是れ有る哉、萬有の中に立ちて獨り超然として靈界の羈

を以て誇るもの、繩にて結ぶ之人間を措きて何かある、他の繩をときやらむ者、馬もなし能はじ、牛もなし能はじ。

渠は謝しぬ、情ある人の手に飛び上りてあまた度熱き口づけをなしぬ、切れよと許り細き尾は左右に振ひぬ。身體の自由、精神の自由、渠はいま双ながら得たり、さば次いで何を求めむずる。

哀憐の心は幼き人間の胸に閃ひて、小さき手より菓子を與へき、殘飯を與へき。

渠は肉と骨の發育を得て幼弱は漸次長大に向ふ可く、明滅の殘燈此に膏油を得し思ひありしも。

不運の潜む所、鼻感の機能だに畜だ空かりし。

犬を愛する家はあり、家はあれども既に愛犬の軒に眠るを奈何せむ。

營養の攝取之日に旺なるべき狗の、兒童の與ふる零碎の菓片、街路に落ちし食のみを以て足るべきにあらず、會ま勝手を徘徊して、桶といはず、瓶といはず、頭を没して舌鼓をならすの時、尺度を振つて痛打一鞭、高く叫びて辛うじて逃れし事もありき。

時よは魚店を近ふ過ぎて、先天的嗜好に適したる香高さに、現ともなく踏み入れば、若衆のうむ畜生と大喝しつ、天秤は風を切つて痛く背を打ちぬ。

あはれや號叫の聲、行人の腸を絞つて、杜鵑の血に泣きしに似るも、雲より雲に入る鳥の胸はさころ人の思ふより輕からむ、されど、打たるゝも、蹴らるゝも、逃れ行く路なくして、迫害殘忍の敵よ接して住まざるべからざる渠が運命は、なか／＼に野飼の幸の尊きよと、捨てられし瘠の蔭に歸りて、月を仰ぎて高く泣きぬ。

煩悶あればころ神よ祈れ、飢ゆればころ食を要すれ、求食の手段を論ずるを休めよ、禽獸に體を説く世之より愚なるなけむ、最高の人間にして而して飢餓の爲めに偷盜をなすもの、吾れこれあるを聞く屢。

かつてなりき、牛肉店頭を訪づれて一片の恵に與らむとせし時、牛切庖丁は飛むで渠が身に當りぬ、鮮血迸流溝板を染めて、哀狗天に沖するを聞く、裡に笑聲は起りぬ、嗚呼配合の妙なるや、吾れ却つて銃刃の渠が腹を貫くまで何故投げつけざりしかを憫れむ。

寝るも辛き人の軒端、夢なれば宥すらむと恐れに満ちて身を横ふるを、首を擡むで道に投げぬ、吾れ夜毎床に入りて、此悲しき聲を耳にし、惘然として傷みに泣く、願くば吾が耳聾ひて聞へざらむには、近づけば蹴られ、遠かるも石の礫來る、施すべき術、夫れ人間に問ふ事を得む乎。

吾れ一日菓子を他の犬とに與へき、各の前に落つるもの



各の拾ふに任せぬ、一人あり「如何に渠の貪り食ふを見よ、君が手に目を放たずして他の前に落つるをも得むとす、汚はしき乞丐の狗に與ふる勿れ、その形體見るだに嘔吐を催す也」と。

人よ!! 渠は何が故に他の犬よりも貪り食ふや、何が故に嘔吐を催さしむるに至れりや!!

\* \* \* \* \*

げにや命のいとほしさに、斯くても受くる現世のくるしみかな、消ゆとも惜むべき三寸の息ならぬを、死の安き手、來るの何う遅きや、食を與へし吾は永遠の安樂を渠に與ふべく思ひぬ。

されど、然らば人は奈何に言はむ、吾れ此處に「まどひ」有り焉。

雨蕭々と降り出で、軒滴眠りを誘ふ、旅の獨りの寂びしよ満ちしかば新紙とりてみるに、怨に燃えて水に沈みし人、貧に堪へずして軌道に枕せし人、病を憂しと毒を仰ぎし人、簇々として目に入りぬ。

凄愴の感骨に泌み、歌ふべき世ともおほねず、過ぎし昔の無き幸をだに、かへり見すれば數ならざりしと思ふ人あらば、一夜の命の寔よつらかるべし、味氣なき一万八千日、忍び得むや嗚呼忍び得むや!! 然り、人間は智を有す、智あるが爲めに渠等苦惱を死にて除きしにあらざるや、

是れ餘りに生命を輕むじたり、自己一人の生命は地球上一の存在を認めず。

さるにてもかの狗可愛や、渠は呱呱の聲を發して世に出づるより棺を蓋とるゝまで、過去現在未來の同胞兄弟、并に萬有に對し重き負債を負ふものなりとのトルストイが宗教觀を生れながらにして得、實踐的曲型を示せるもの、天に榮光、幸よ渠の上に天降れ、爾も亦義しき、貧しき、心清きの天堂に入る如く、夢も終に昔を隔てむ。

### ○支那醫界之前途

支那留學生王建著

同學告余曰、雜誌中宜撰文入之、余不敏、本不敢握筆、然欲稍盡弟子之禮於學校、又不敢違、爰撥暇作

此文、尙望 師長及同學諸君、惠賜筆削爲幸、

客有造余室者曰、支那醫界若何、翹曰、又有客至、問曰、支那醫界若何、問者不止二人、答者不止二次、如桃源洞中、避秦人爭向漁翁問秦漢故事、如遊山陰道上、層巒疊嶂、應接不暇、自今以始願以筆代舌、敬謝客、

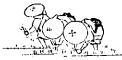
客非會讀漢籍者乎、黃帝岐伯、醫藥之始祖也、扁鵲倉公、中世之名流也、靈樞素問、窮極秘奧之書也、難徑本草、金匱石室所藏也、我國古時、思想甚發達、製作甚美備、客所捨知也、不幸中徑變故、窮理格致之學、多所失墜、

此吾人所深痛者、抑亦不足諱也、敬以告客、

越至於今、醫界雖無發明、然載籍極博、非腦力簡單之人所能讀也、此等書、遍布國中、所謂汗牛充棟者也、然余竊有疑焉、何故與他國之萬有學、大相異乎、果孰真而孰僞乎、此問題、余研之蓋久、今乃恍然有所悟、以東洋之文明、吸收西洋之文明、二十世紀之特色也、泰西諸學、輸入我國、此不足懼、寧可歡迎者也、

近日我國病者曰多、病者曰多、則其需醫也日急、顧我國非少醫家、少新派之醫家耳、余方以新派醫家自任、且欲多養成此輩、然腦中吸收新智識、有一定之速率、余與國人、心急步遲者、非無故也、我國古時、爲世界先驅、今則爲世界後殿、此余所深惜也、雖然龜兔競走之喻、妙喻也、只今啓行、余猶可自慰焉、

客之同胞、由印刷物告余曰、吾人者、舉西洋之文明而紹介於全亞者也、此言雖傲余甚佩之、自今伊始、願客盡紹介之責任、以裨益我醫界、雖然、既往之勢力、雖甚堅大不足恃、未來之勢力、亦非中途酣睡者所能得也、競走之喻、銘心久矣、願與客交勉之、



## 會 報

### ○ 人事彙報

▲小西俊三氏 は四月下旬補充召集として第九師團第七聯隊に入隊せられ同時に岐阜縣管内壯丁検査醫を特別會員生駒廣太郎一等軍醫と共に命せられ四月廿二日岐阜聯隊區へ出張せられたり

▲渡孚貞氏 は東京醫科大學内科介補とりて研究の處先頃金澤醫學專門學校法醫學講師として主任の上授業せらる

▲富田稔啓氏 は神戸病院に奉職の處先般辭職の上福井縣立病院へ奉職せられたり

▲橋本喜久三氏 は第十師團(姫路)野戰歩兵第十聯隊第一大隊附にて出征せられたり

▲太田長作氏 と第五師團野戰電信隊附にて出征せられたり

▲藤濱謙氏 は第五師團野戰歩兵第十一聯隊第三大隊附にて出征せられたり

▲金澤醫學專門學校及び石川縣金澤病院職員中にて第九師團に召集せられたる諸氏は夫々頭書の任務に附かれた

6

出征部隊附

步兵第七聯隊	(現)	河村多郎氏
全	(現)	吉井幸次郎氏
全	(現)	木下克雄氏
步兵第三十五聯隊	(現)	國分金城氏
全	(現)	羽根田信次氏
全	(現)	齊藤幸作氏
步兵第十九聯隊	(現)	駒井定哉氏
步兵第三十六聯隊	(現)	松村魁氏
全	(現)	酒井佐太郎氏
騎兵第九聯隊	(現)	高岡榮氏
全	(現)	小島顯治氏
野戰砲兵第九聯隊	(現)	小林茂氏
全	見習醫官	野嶽理七氏
工兵第九大隊	(現)	清水秀夫氏
架橋縱列		神保正長氏
彈藥大隊		沼田布之氏
全		諸角友平氏
輜重兵大隊		百谷義一氏
全		辻本辰之助氏
全		吉江榮太郎氏

衛生隊

全	(現)	增田貞吉氏
全		永井環氏
全		深美貞之助氏
全		堀政次氏
第一野戰病院	(現)	野口詮太郎氏
全		東良平氏
全		近郷重孝氏
第二野戰病院		田中一次郎氏
全		八牧政孝氏
全	(藥)	圓山万三郎氏
全	(現)	鶴見金十郎氏
第三野戰病院		河合鷺氏
全		北川健三氏
全		田中正一氏
兵站彈藥縱列		森川修氏
衛生豫備員		宮井勇氏
全		島村豐次郎氏
全	見習醫官	瓜生尹重氏
全	(藥)	林常雄氏
全	(藥)	山崎彥太郎氏
患者輸送部		森岡市太郎氏

留守諸部隊附

留守第九師團軍醫部 (現) 橋本監次郎氏

全 小西俊三氏

歩兵第七聯隊補充大隊見習醫官太田精一氏

歩兵第三十五聯隊同大隊(同) 福岡喜洋氏

歩兵第三十六聯隊同大隊 河村賢太郎氏

全 杉山政長氏

砲兵第九聯隊補充大隊 生駒廣太郎氏

全 (見習醫官) 橋本三九氏

第九師團補充馬廠 梁貫男氏

金澤陸軍豫備病院 (見習醫官) 島誠郁氏

全 (藥現) 淺井文太郎氏

毛利精一氏 歩兵第七聯隊補充大隊

岡島敬治氏 歩兵第三十五聯隊同大隊

右は本月十六日見習醫官を命せられ教育上下記の隊に編入せらる(之れは太田、橋等の諸君とは違ひ軍醫の勤務を取るにあらず全く教育に受くる爲めに)

▲小林茂氏 は金澤醫學專門學校生理學分擔の處時局に際し本務多忙の爲め辭職せられたり

▲東良平氏 は高岡市に於て私立病院を起し盛に患者治療に従事せられたるも時局に際し野戰病院附として召集

せられたり

▲瓜生尹重氏 は見習醫官として歩兵第七聯隊附として召集せられたり

▲橋三九氏 は見習醫官として歩兵第三十五聯隊へ召集せられたり

▲須田嘉三郎氏 本校病理助手として就職の處今般新潟縣警察本部檢疫委員を命せられ直に赴任せられたり

▲杉山政長氏 三月一日滿期除隊せられたり

▲輕部修一氏 福井縣鯖江町に於て鯖江診療院を開き五月廿五日夫々披露せられたり

▲小西俊三氏 壯丁検査醫を命せられたる同氏は動員の爲め徵兵検査中止せられ本月十一日歸團せられ師團軍醫部に於て執務中

▲藤原敏夫氏 四月廿五日十師團附を命せられたり

▲清水齊雄氏 昨年北米に留學せられたる同君は目下左の所にて傍ら實地研究中の由

Mr. T. Shimizu,

224 Wilmington st,

Los Angeles city,

U. S. A.

▲高安會長 金澤病院の用を帯び去月十六日九州地方へ出張せらるる本月二日歸澤せられたり

### 第三十一回講談會

昨年十一月廿八日(土曜日)午后二時半より内科講堂に於て開會

○開會の辭、上田部長

○第一席 Die Erage. 奈良八郎君。加賀江沼郡山中

温鑛泉の脚氣又特效ありと云ふは如何なる理由かとの一疑問を促へ來つて、脚氣の原因説、該鑛泉の分拆表を比するよ何れの成分が脚氣治療上効を奏するや、將來の研究を要すと、

○第二席 Kataplexie. 患者供覽、大西教授。教授は「カタレプシー」を有する一男患者に就き、種々の位置を與へて所謂蠟樣撓屈 Flexi bilias cereae の状態を示され且つ本症状の原因を述べらる。(教授は用務のため他日を期し今回はこゝまで中止せられたり)

○第三席 紳士 釜口長助君。當今の所謂紳士なるものを解剖し罵倒せらる、其前半、

○第四席 偶感 石川教授。体育の必要を痛論せらる、縷々數方言、

○第五席 眼、伊藤顯徳君。眼力の養成を語る、

○第六席 結核性腹膜炎、宮田教授。結核性腹膜炎の外科的療法即ち開腹術の歴史、諸家の成績等を述べ、終

りに、教授の本校に於ける成績を報告せらる、

○第七席 我等、岡田秀達君。我等は活氣なかべからず、吾人の志望は遠大ならざるべからず、醫之事をなすに比較的便利なる位置にあり、此の位置に於ける我等卒先して社會の腐敗を救へ、

○第八席 和合(續き)、村上教授。前會よりの續きとして今回は(一)學術研究上、(二)醫學各分科間、(三)徳義、學問の和合の必要を述べらる、

○休憩……廿分間……茶菓

○第九席 二三のデモンストラチオン、小川教授。平易にして、下級生にも理解を得べき説明を以て、數日前得たる、(一)副卵巢囊腫、(二)死胎兒、(三)胎盤、につきデモンストリーレンせらる、

○第十席 偏智的思想、佐野愛二君。當今の青年が單に智的に頭腦を傾くるを痛論し、宗教の必要を述べらる、

○第十一席 夢に百年後の醫學學校に遊ぶ、朝倉重敏君。百年後に於ける社會并に其の當時の醫學學校の状态を説ける夢物語、……時間なきため未完、

○閉會の辭 上田部長。時は午后七時すぎありき、會するもの特別會員二十余名、通常會員三百名、さしにも廣き講堂も立錫の地なかりき。(よし)

## ○第三十二回講談會

二月二十七日(土曜日)午後二時より内科講堂に於て開かる。先づ上田講話部長登壇、開會の辭あり、次で

○第一席 紳士、釜口長助君。君は得意の辨を以て前會に於て其の緒論に止めたる本論に説き入られたり、要は現今社會道德の頽れたるを穿ち、其矯正策として信仰を推奨せらる。

○第二席 所謂「成効」、佐野愛二君。流暢圓轉なる君の舌端は先づ所謂「成効」の解釋を試み。次で、眞の成効を致すには、己れ一個の人として成効するを以て人間の最も貴ぶべき成効となすべく、之れを全ふするに宗教を以て最も信頼すべき途となすと。

○第三席 偶發縊死の一例、速水昇君。Casper, Taylor Tandem, Zülch, Smith, Timan, Maschika, 氏等の偶發縊死の十二例を述べ、君の實驗に係はる其の一例を報告せらる、即ち四歳の一童兒、多くの兒童と神社の石段の縁を滑り下りつゝ、戯れ居りしに、前垂(胸掛の)の紐が其處の釘にかゝり死に就きたるなりと。

○第四席 學會を起すべし、渡邊彊君。本誌第三十一、二號合刊所載の「學會を起すべし」を敷演せらる。

○第五席 放線狀菌デモンストラチオン、上田教授。

先づ放線狀菌の性質を述べ、次で教授が本年東京に於て人類の全病より得たる菌に就て各種の培養をなしたるものを示説せらる。

○第六席 *Microspectroscop* のデモンストラチオン、村上教授。教授は該器の構造を説明し、且つ之れを裝置して血液吸収線を示されたり。

○第七席 鬱積乳頭、高安教授。鬱積乳頭の檢眼的所見、自覺症、豫後、等に就きて述べられ、原因として從來の諸説并に自家研究上より細論せらる、教授の實驗七例によれば單に鬱積によりて起り、無炎症性のものなりと、尙説示顯微鏡を以て數種の標本を示さる。

○第九席 蛋白尿性網膜炎患者供覽、朝倉重敏君。トルナル氏の檢眼鏡を以て該患者の眼底像を説示せらる。(本誌第三十三號原著及實驗欄に掲げたもの)、尙三四の演説あるべき筈なりしも時間なきため、午後六時半閉會しぬ。(よし)

## ○弓術部春季競射會

天氣澄和し風物鮮美、輕風意に適し心身自から悠然たるの時、我が十全會弓術部は、四月二十三日(土曜日)午後本校射的場に於て春季競射會を舉行せり。

此の日午前中諸般の準備を整へ、正午より肩入を初む、

集るもの百數十、各學校撰手十數名、來賓二十余名、今や遅しと待ち構へぬ、やがて一時半点取競射は初まれり、年來鍛へあげたる手腕めてたく、満月に引き絞り、ヒューと放てば、見事黒星貫きて、満面の笑禁せざるあれば、手筋の狂ひやしけん一点も得で、切齒するもあり、次で數取競射を終へ茶菓の饗應ありし後、來賓、各學校撰手、源平、射割等の順序にて競射は行れぬ、殊に來賓競射の際は拍手場内にあふれ、各學校撰手競射には、觀衆をして拳を握らしめき。

終りて、各勝者に賞品を授與せられ、閉會せしは黄昏近き六時過ぎなりき。因に本日受賞者は左の諸氏なり。

- 点取競射、尺五的(五手)      ○点取競射、尺的(五手)
- |              |           |
|--------------|-----------|
| 一等 七十一點 佐々木君 | 一等 三本 福島君 |
| 二等 五十一點 山君   | 二等 三本 佐野君 |
| 三等 四十六點 中島君  | 三等 三本 萩野君 |
| 四等 四十點 高野君   | 四等 三本 石橋君 |
| 五等 三十八點 谷道君  | 五等 二本 原君  |
| 六等 三十七點 溝口君  |           |
| 七等 三十三點 淺田君  |           |
| 八等 三十點 高島君   |           |
- 來賓點取競射尺五的(五手)
- |              |              |
|--------------|--------------|
| 一等 二十五點 辻本醫員 | 二等 二十五點 村上教授 |
|--------------|--------------|

○各學校撰手競射尺的(五手)

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 一等 六本 下村君(四高) | 二等 六本 楠君(一中) |
| 三等 六本 秋山君(本校) |              |

○源平競射尺二的  
受賞者無數

○射割

神谷君(四高)

猶當日委員の-new案に係る「三人落し」は、時間なかりし爲め、行ふ能はざりしは遺憾とする所なり。(みき)

### ○本校紀念式

去月十一日、本校第三回紀念式を舉ぐ同日午前八時職員先生一同濟々堂に會し、校長は祝辭に併せて本校に對する文部省の方針を述べられ學生總代小原芳雄氏の祝辭を朗讀し式を終ふ

例により職員一同、醫學科四年藥學科三年級一同より左記の寄附ありたり

- |               |          |      |
|---------------|----------|------|
| 一日章旗          | 貳拾壹旒     | 職員一同 |
| 一細引           | 參筋       | 同    |
| 一カッサンテールフル掛貳枚 | 醫學科三年級一同 |      |

### ○十全會講話部第三回總會

世は擧つて戦争に熱中しつゝあるの時、本會講話部總會は本校濟々堂に於て開かれぬ。

五月四日(土曜日)夜來の雨を犯して時刻前に集り來るもの引きもきらず、午前八時より供覽部を開く、借覽部は今回始めて設けたるものにして、眼科教室、病理實習室、病理標本室、及び暗室を以て之れにあて主に開業醫諸君の參考に資せん目的を以て各科新奇の器械、標本等を準備しものなり。眼科教室に入りて右又は外科、耳鼻咽喉科の新着器械を陳列し續きて内科の諸器械あり、かへりて左右には産科標本、模型、婦人科器械并外科の歴史的諸器械あり更に折れて乳糜血尿、法醫學器械、眼科諸器械あり。出て、病理實習室に入るに解剖學教室よりの神經終末を示せる精巧なる數箇の顯微鏡標本、其他數十臺には病理顯微鏡標本を示し、暗室には分光鏡を裝置せり。而して委員、并に各科醫員は一々説明の勞をとり來衆をして満足を與へしめぬ。

やがて、午前十時、一同の供覽部を一巡して會場に入りたるや、高安會長登壇、開會の辭あり。次で以下の演説ありたり。

第一席 チャーレス、ダーウソン、吉野要君。十九世紀に於ける英國博物學の大家チャーレス、ダーウソンの傳を述べ氏の有名なる蚯蚓の説を紹介して、こは氏の緻密な

る觀察によれり、されば氏の如く吾人もまた緻密なる觀察力を養成せざるべからずと。

第二席 破格腸扶斯の一例、建部鈴次郎君。先づ定型的腸室扶斯の原因、病理、症狀等を要述し、次で君の實驗に係はる一例を報告せらる。患者は廿五歳の男子にして、惡心、嘔吐、盲腸部疼痛、咳嗽及び軽度の熱發を以て起り、其の後、全身羸瘦の漸進、不定しかも僅かの熱發、時々盲腸部の疼痛及壓痛を有せしも發病後約三週にして、心麻痺のもとに倒る、剖檢上、盲腸部に於て縦經に沿へる長さ十四仙、幅二仙、邊緣銳、ウンテルミニレンしたる一箇の潰瘍、脾腫大、を見認め、ヅダール氏反應は陽性なりし、鏡檢上には潰瘍の部に圓形細胞浸潤と小桿狀菌を認め、また脾には栓狀出血あり、且つ全様の菌を發見せり、此菌は兩端の鈍縁に終れる小桿狀菌にして「グラム」氏法にて脱色せり、而して氏は解剖上の所見によりて、始めて腸室扶斯なる診斷を下すとを得たりと。終りに破格症の症狀、リテラツールに就きて述ぶる所あり、氏の例、其の不全腸室扶斯 *Eyphus abdominalis* によつて該當するものならん、また死因たる心麻痺の原因は發熱の軽度なりし爲め細菌の毒素が比較的強度に作用せしによるならん。

第三席 死とは何ぞや、高木琢磨君。死に就て科學的、



哲理的方面より論じ、吾人の生命は無窮なり、死と運命なれば吾人は人生の目的、性質を究め、各自の天職を守り現世に残す所なかるべからずと結ぶる。

第四席 Pruritus senilis und sein ein Beispielp. 齊藤

傳平君。君は流暢なる獨乙語を以て今冬期歸省中の實驗に係はる本症の一例を述べらる、患者は八十九才の女子にして、生來健全なりしが、數日前より肌表に輕微の癢痒を起し、漸々増劇して一二日後には最早自己の爪を以て癢破するのみにては不充分なりし故「ヘチマ」の皮にて

摩擦するに至れり、其の癢痒は持續性に非らずして、發作性に表れ、多くは褥中にて温まるるとき、或は精神亢奮の際に起る、初めは背部のみなりしも次第に増大して頭部の外、全身肌表に蔓延せりと、依りて診するに、他覺的變狀を有せず、發疹、寄生虫等なく唯癢破の續發現象として僅かの表皮剝脱を見認めしのみ又尿檢上、異常成分を發見せざりき。此等の症狀によりて老人性癢痒症とし、其豫後不良なると考へ、處置としては五%「メントール、アルコール」、及び七%「ザルチール、アルコール」を患部塗布料、催眠の目的を以て抱水格魯刺兒を與へ、時々沐浴して全身を清潔に保つべきを命ぜり、然るに二週后には癢痒漸次減退に就けり、茲に於て疑ひなき能はず彼の「レンツセル」氏皮膚病學教科書よは「Eine Heilung

Des Pruritus senilis ist natürlich ganz unmöglich」とあり、余の例は果して老人性癢痒症なりしや否やと。

第五席 スラボニツク敗亡と大和青年、岡田秀造君。戦争の結果、スラボニツク族の敗亡は近きま在るべく、

大和民族の活動の期は來れり、されど現狀態の我國民は大強國の國民として余りに不健全なれば、吾人青年は卒先して此の革命の任に當らざるべからず、我校學生の活動を絶叫せらる。

第六席 偶感、高野宗重君。君の理想の一端として清國醫術の劣れること、隣邦たる我國の醫師の奮つて之れが指導啓發の任に當るべきなりと述べらる。

第七席 Eine Vater und Mutter. 内海友七君。得意の獨乙語を以て人情の委曲を述べらる。

休憩……晝飯……午后一時より開會。

第八席 察邇、井上只次君、君は初め論語中の子曰舜其大知也與舜好問而好察邇言隱惡而揚善執其兩端用中於民其斯以爲舜乎、を誦讀して題意を解せられ、天職自覺に就きて述べて我校出身の出征諸氏の餞別とすと。

第九席 Wirkung von Handspiel. 奈良八郎君。君は醫學的の智識を以て「サンダー」亞鉛体操の効用を擧げて室内運動の第一として推奨せらる。

第十一席 死○后○八○週○を○經○て○娩○出○した○る○女○性○胎○兒○の○一○例

八田智證君、本誌本號の原著及實驗欄に在り。尙、氏の昨年五月以降小川教授のクリニクに於て實驗せる産婦につき有益なる統計を示めされたり。

第十二席 一報告、笠雋吉郎君。小川教授のクリニクに於て實驗したる産科學上興味ある二例をデモンストレーションせられたり、一は妊娠八ヶ月にして羊膜水腫を起したる男性胎兒の腹部に三箇の腫瘍ありしもの、他は臍帶前置を起し、分娩中の死兒にして右前頭骨の部より著しき凹陥部あるものなり、其の詳細は君に乞ふて本誌に掲載すべし。

第十三席 醫學藉文學以傳布 (留學生) 王建善君。君は清國語を以て述べ、后之れを日本語にて更に演述せられたり。原稿は乞ふて本誌上に掲載すべし。

第十四席 Der Priester J. K. 玉森法靈君。得意の獨乙語を以て一休和尚の性行を述べらる。

第十五席 リーグヘル氏尿糖の化炭酸定量法、渡邊君。君は Prof. Dr. E. Riegler 氏が Münchener Medizinische Wochenschrift No. 5, 51. Jahrgang, 2. Februar 1904. に報告せる eine rasch ausführbare gasmometrische Methode zur Bestimmung des Zuckers im Harn を紹介せらる。此の原理は葡萄糖が過満飽和里によりて酸化せられ、炭酸加留膜并に二酸化炭素を形成す、即ち  $C_6H_{12}$

$O_2 + 8KMnO_4 = 4K_2CO_3 + 2CO_2 + 8MnO_2 + 6H_2O$  に原きしものにして此の  $O_2$  を硫酸によりて分離し其の量によりて、糖の量を算出するなり。

休憩、……茶菓、……二十分、此の間特別會員のみ別室に於て宮田教授の「レントゲン」光線のデモンストラチオンありたり。

第十六席 吐血を疑はしめたる衄血、釜口長助君。六歳の男兒、腸胃症狀を有して數日來絶食せしは係はらず、未消化の食物片を混じたる多量の吐血を起し、其后、虚脱に陥れる患者に就き、初め胃潰瘍より來れる吐血ならんかとの疑ひを置けり、剩さへ腸胃症狀のあるあり、胃部の疼痛あり、便秘の在るあり、唯年齢の余りにすくなきは疑ひなき能はざりし、其の後、種々検査の結果、前日衄血を發し家人は前鼻孔に綿栓を施したる事、并に前鼻孔に血痕の附着するを見認めたることにより衄血を嚥下し其血液を吐出せしものならん、其の後數日にして快方に向きけりとの一例を述べて、吾人の注意を喚起せり。

第十七席 「アクロメガリー」に就て、并に患者供覽、大西教授。アクロメガリーのリテラツル、症狀、原因、診斷、豫后、療法を詳述せられ、終りに該患者一名を供覽せらる、原稿は先生に乞ふて次號の本誌原著欄に掲載すべし。

第十八席 人格論、佐野愛二君。心理的方面より論じ來り、人格とは何物なりやを説き、内外古昔の英雄志士の例を擧げ、人格を成す所の最も主なるは主義と趣味との二者なりと。

第十九席 腸間膜囊腫デモンストラチオン、山田謙治君。日本に於ける腸間膜囊腫の報告は西村、北川、中原、寺田、伊藤氏の五例あるのみにて、此の内單純性のもの多く、多發性のものは北川氏の一例あるのみ。兩性の比較上女に多く、西洋にて三十二例中男八例、日本にては女四、男一例なり。年齢の關係は二十才—三十才のものに多く、其他の年齢にては少し。發育の甚だ遅きあり、又速なるあり、後の場合にては自覺症甚し。診斷は困難にして多くは偶然に發見せらる。患者は二十三才の女にして石川縣石川郡山科村の産、昨年八月初診。体格營養共に中等、顔面蒼白、胸部には變狀を見認めず、腹部は膨滿し鈍痛を訴へ壓によりて増加す、腹腔内に數箇の硬結を觸知す、胃腸の障害等なく、全身衰弱も甚しからざるによりて結核性腹膜炎の診斷の下に治療を施したるも、効なし、依て退院せしむ。然るに本年四月再び來院、以前よりはやゝ増大して、臍部の左下に於て著し、腸骨窩及び心窩部に壓痛あり、打診上一般に濁音或は半鼓音の部あり、患者は手術を希望せしにより開腹術を施行せ

り。式の如く腹壁を切開するに單純の卵巢囊腫よりも出血や、多かりき、(氏は實驗上卵巢囊腫の手術にて腹壁切開の際出血の多少によりて手術の難易を推知するを常とす) 腹膜を切開するに直に黒色を呈する腫物出で來り、其腫物は鶏卵大にして莖莖なく柔軟滑澤の一ケの囊腫なりし、又其の傍らにも全様なるものあり、此の腫物を牽引すれば破裂すべし、故に大網膜に附着する所は之れと共に切除したり、尙之の下に多數存せり其大なるは鶏卵大に達し卵圓、圓形等種々あり、莖は存するあり、又無きものあり此等の腫物は腸間膜のみならず其他の部即ち腸壁、胃壁、膀胱等よりも生ぜり、故に大なるは切除し、小なるは之れを破れり、又小豆大位のもの之其儘放置せり、數は不明なるも、破りしものにても凡ろ三百位ありたり、而して腹壁を縫合し全く手術を終る迄一時間を要せり。術後の経過可良にして三週間計にて營養回復し退院せり、其の間に於ては更に腹部膨滿を來たさざりき。今こゝに供覽すると其切除したる一部にして漿液性の内容を有す、鏡檢上にも囊腫なりき。而して本例は Seröse multiple Cystenbildung なり。

### 討論

○宮田教授。教授は其の發生地不明なれども異常に大にして血液性の内容ある腹腔の腫瘍を有し開腹術を施せる

一例に就きて述べられ、且つ患者を供覽せられたり。

○山田謙治君。猶數言追加せられたり。

第廿席 精神の体育 小川教授。本問題に入る前、先

づ前數氏の演說中、氣付きたる所を述べんとて、

八田氏の演說……死せる胎兒の母体内に存在する期限、

并々副乳腺につきて、

笠氏の演說……羊水の量につきて、

吉野氏の演說……チャールス、ダーウソンにつきて、

高木氏の演說……死につきて自己の解釋、

齊藤氏の演說……獨乙語の二三の誤謬注意、等ありき。

吾人醫者は精神の体育の好位置にあり殊に軍國の際なれば其の修養の機會多し、これにつきて多く述べざるを要せず、唯諸君の實行を望むのみと。

閉會の辞、高安教授。……會員の多數集まれる際

なれば會長として會員諸君の事後承諾を得たしとて、本

會はさきに臨時協議會の決議により第一回軍事公債應募

高金七百圓を申込みし所、全部應募せし事、發行價格の

最低之額面百圓に付金九拾五圓なりしも、金九拾六圓五

拾錢を以て應募價格とせし事に就き述べられたり。……

時正に午後六時、

尙演者不參の爲め或は時間なき爲め、やむなく中止せ

しは

精神病診斷法、

酒精蒸留器、

日本人の本性と習性、

死亡數の統計、

欺旨の鑑定、

X光線の診斷及治療上應用、

未定、

人と牛との結核、

の諸氏なり。

當日は時局の爲め來賓、特別會員側の出席者意外に少なく、四十余名にすぎざりしも、通常會員は三百五十を數へ、頗る盛會なりき。

(筆者の淺學薄識なる、筆録中或は多少の誤謬なきを保せず、是れ豫め演說者諸氏に深く謝する所なり。

よし生)

よし生)

### ○雜誌部 雜報

○圖書の購求、雜誌部にては過般左の圖書を購求せり

新訂生理學講義 全部四冊。新訂 四版 黴毒學 全一冊

○石川教授は自著人体解剖學、第三卷一冊、を寄贈せられたり

○高安博士祝賀會にては左記の圖書を購求直に本會へ寄

贈せられたり

病理總論講義、臨床細菌學、有機化學講本、增訂 四版 眼科學  
手術篇、醫化學實習、鼻科學(二版)、耳科新書各一部  
つゝ。

○有壁一雄君の退校、久しく雜誌部にありて文を誌上に  
照かし筆を雜誌部の記事に染め大に盡力する所ありしか  
此の程病氣の爲め退校せられたりとは遺憾限なし。

○上野忠君、同君は病氣靜養中委員を辭せられしが最早  
全愈に赴きたれば有壁君の後任として再び雜誌部の委員  
を承諾せられたり。

○第三十四號編輯會、去月廿日午後二時より庶務所内に  
開く小川部長、小原、上野、渡邊、建部、藤井の各委員  
出席午後五時半散會す、原稿の多き經費の少なき遂に全  
部を網羅すること能はず一時の纏縫策を講ずるに至りた  
るゝ甚だ遺憾とする所なり。

○千葉醫學會雜誌休刊、同會雜誌と都合により向一ヶ年  
間休刊せる旨本會に通知ありたり。

○小西俊三氏へ寄贈、特別會員同氏は第九師團の動員令  
に接し召集せられたるにより同氏の教授を受けたる醫科  
第三年級一同、同四、二年級の有志相計り腕卷時計一個  
を寄贈せられたり。

### ○山碕教授歸校式

明治卅四年二月文部省留學生を命せられたる山碕教授は  
獨澳大學にあること滿二年期滿ちて本月二日無事歸朝せ  
られたるにつき本校は本月九日午後一時半より式を濟々  
堂に擧ぐ高安校長は同教授の在留中并に歸途無恙歸朝せ  
られたるを祝し併せて今後の希望を述べられたり次に四  
年生小原芳雄君學生總代として祝辭を述べ

#### 祝詞

回顧スレバ、先生ト離別ノ情ニ尽キザリシハ、實ニ二  
星霜ノ前、寒威肌骨ニ徹セシ二月八日ナリキ。爾來先生  
ハ専門科學ノ精緻ヲ以テ世界ニ冠タリト稱セラル、澳  
ニ、獨ニ、或ハ我邦醫學ノ進歩ヲ示シ、或ハ親シク専門  
大家ニ接シテ斯學ノ蘊奧ヲ究メラレ、正ニ留學ノ期滿  
チテ歸朝セラル。生夜日等鶴首シテ先生ノ無事歸校セ  
ラル、ノ日ヲ待チツ、アリシニ、今再ビ溫容ヲ拜シ欣  
喜措ク能ハズ。希クハ閣下、新タニ研鑽セラレタル所  
ヲ以テ、大ハ邦家ノ爲メ、小ニシテハ我校ノ爲メニ裨  
益教導セラレンコトヲ。聊カ祝辭ヲ陳テテ祝詞ニ代フ。

明治三十七年六月九日

金澤醫學專門學校生徒總代

小原芳雄

次に山崎教授の挨拶ありて式を終へたり

### ○山崎教授の歡迎會

曩に文部省の留學生として獨逸兩國に學び、内科病理學を專攻し今や期滿ちて無事歸朝せらるゝ之れ誠に先生の光榮にして生等の等しく欣喜にたへざるころ、我か校學生は同教授の歡迎會を開く

去る九日同教授歸校式後直ちに會場を濟々堂に設け、學生一同坐に付き團欒の間正賓同教授を迎ふ、池田恒太郎君起て開會の主旨を述べ先生の無異素志の貫徹せられて再び本會に相見ゆるの幸に接せしを祝福し併せて希望するところありたり

勿謂二ケ年の星霜短かしと、先生が彼地諸大家につきて研究することの深き、其の得る所の至大なる吾人同教授の獨逸語に通曉せるころより推せば其の効果の必ずや數歲の上に出するものあるを想見すべく、且つ彼の學友と親交して社會的觀察のよくせられたるも亦推知すべし今や吾人は此の席上に於て先生のれ土産話を聞かんとす知らず先生の話頭は那邊に其の糸口を解き初むることになむ

主客は團欒相和して暢々春の如く、茶あり、菓子あり而して山海の珍とすべきものなしと雖も先生は好く我等の

意の存するところを了せられ、立て一場の講話を演せらるゝ、先生かち満足の姿は顔に現はれて悦ばし

### 學生生活!

之れ抑も先生が彼の地學友と親交して其の間に見聞せられたる有益の好問題なり、乞ふ其の主要を記さん  
彼の Hochschule とは日本に於ける新設分科大學の如く或は専門學校、私立大學の如くなれども Universität と同義にして其の名の習慣的異なるに過ぎず期くて此の Hochschule, Universität にありて之一定の校規なく又制裁なし Absolute Frei なり只だ學生間に一團體を結じて各自制裁を加へ勉めて自治心を養成しつゝあり此の團體を Verein od. Korpus と云ふ各大學に四、五、十個以上を備ふ員數も少なきは十二三名多きは百名以上を數ふ。初めて大學に入るや各團體は地方的區域に因り或は知己の關係により各勧誘す然れども本人の望む所に因りて何れの團體に入る事を得べし、斯くて其の Verein に入するや之を Fuchs と稱し服裝特に帽の色彩により(白、赤、青紫)て之を在來のものとなし、在來のもの、中に此の Fuchs に團體の規則制裁を教訓する者あり之を Fuchs-major と稱す、一年の終りに到れば一定の式を経て昇進すべし、若し不名譽の行爲あり没道義の舉動あるときと未だ此の式に加はること能はず永く Fuchs たらざるべか

らす、故に *Fuchs* の間は勉めて謹慎を守り、柔順にして先進者を敬し毫も抵抗することなく、唯々として命之れ従はざるらむことを恐る、斯くて其の式を擧ぐるや團体員一同盛大なる會を開き *Fuchs* には更に其の欲する稱呼を名乗らしめ、其の頭部よりビールを注ぎ、正規の帽を授與し、詩歌を唱し舞踏を演ずるなど甚だ壯なり。

此の團体員は社會に出するも脱することなく *Alte Herrn* として永久之に加はりて其の規定に従ふものなり、又團体員は毎週或は隔週一回を定めて嚴重なる規律に因り *Partie* を演ず之廳て他の團体或は同團体中に起る爭議により實地に *Partieren* する練習なり

大學には毫も校規を以て束縛せざるにより此の團体によりて自治の精神を發揮せらることは誠に彼國の美譽と云ふべし」と次に

大學生の卒業及卒業式につきて

*gründlich, praktisch* によりて階級を異にすれとも日本の如く *Klassenheiligung* せらるることなし卒業試問も學生より希望し次に學校は其の期日を報じ第一、第二、第三を分ち第一試問に及第するものは第二試問を受け更に之に及第せば第三試問を受け全部を結了すされど學校は卒業式を擧行せず卒業生より各資金を投して式を擧げ學友知人を招待す婦人も亦喜んで此の招きに應ず、斯くて大學

總長及學長は祝詞を述へ卒業生も辭を呈し豫て教授中証書授與者を依託せる人ありて此より証書を受く卒業生と大學に保存せらるる、錫 (*Gift*) の如きものを握りて誓約し來會者は卒業生の手を握りて以て其の式を終はり依りて *Dactor* を得べし、次に

*Demonstrator*

大學を出するや直に開業するものあれとも彼國は青年者を信すること薄く以て其の手腕を振ふこと能はず故に卒業後は各専門の科に付きて *Demonstrator* となりて實地研究す之れ助手の助手なるものにして熱心なるものは各科共二ヶ年位つゝ之を勉むるものあり由來速成を期せざる彼國の風習なれば之によりて其の得る所益々多く其の手腕を練るに甚だ便なり。

之より餘興に移り蚊相撲。井杭、瓜盜人等の大藏派狂言あり終りに山崎教授の萬歳を三唱し散會せるは五時十分なりと (こと記す)

○例年の通り本學年の科業は去る十一日を以て結了せり  
○提灯行列 去る九日本校内祝捷會に於て職員學生一同之に加どり午后六時より十一時半に至る盛大なる提灯行列をなしたり

○下平教授寄贈 自著診斷學は今や其の十二版を出したるが、后編一部寄贈せられたり

○入學志望者 六月十六日までの分醫學科百八十余名なれば廿日までには二百數十に上らん

○入學志望者 は人員超過し左記の日割にて撰抜試験を施行する筈なり

本校醫學科及藥學科入學者体格検査及撰抜試験は左の日割より施行す

日割

体格検査 七月四日午前八時より

撰抜試験學科及日割

數 學 七月五日午前八時より十一時迄

物理及化學 七月六日午前八時より十一時迄

國語及漢文 七月七日午前八時より十一時迄

外國語 七月八日午前八時より十時迄

以上



通信

○清水齊雄君の通信

(學生某に宛てしもの)

……小生は一月下旬桑港より當市に參り候、之は曾て一日本醫の知遇を得コンパニーにて病院設立の爲に候、當地は桑港より南四百五十哩の都會にて氣候も甚だ宜敷常に晩春の如きに草樹は熱帶産に屬し至て奇觀に御座候、日本人も大分入り込み居り學校も大學を始め皆整頓致し居り誠に好都合に候、小生は目下病院事務の傍ら日々語學研究中にて追而大學のクリニクにも出席の心算に御座候、語學も思ふ程困難には無之殊に醫學上の書物は大差なく候只何分にも耳慣れざる自人の語を聞き取るが難儀とする所に候

當病院患者は主として日本人、稀に白人にて大抵皆壯年の勞働者多く候間面白き病氣も少く、花柳病、不全腸窒扶斯多く別段地方病と云ふやうのものも未だ見受け申さず候(隨分市内は魔界少からず文明國の裏面あやしきものに候)

病院収入は初診壹圓五拾錢、往診市内にて壹貳圓、藥代一日貳拾五錢位にて差程高價にも存ぜず候、然し外科的



治療と、プーボー七圓以上拾圓迄、痔瘻拾五圓以上貳拾五圓位、繃帶交換一回五拾錢等に候、當病院にて平均一ヶ月二百五十弗の收入有之候へ共生活費も従つて多く候へば利益も思はしからず候

白人醫者は日本醫の二倍乃至は數倍の藥價手術料に候茲に面白く感ずるは白人の病院にては殆んど公然に(日本にも内々は候はんも)患者の貴賤に依つて手術診察料の不同に候何事も金錢上に抜目なき米人根性にて曾て一貴夫人の開腹術料に壹萬貳千圓を支拂はせしめ同患者の看護人は百圓を得候由、勿論手術の方法には更に差異なく候又當地白人醫の廣告の方法は生司病院的のものも多く見受け候治療後月賦にて支拂ふ等は誠に簡便にて双方の利益と存じ候

又賣藥の進歩は著しく、尤も日本に於ける如くあやしき製法のものには無之之れ特に御報告申上げ候(中畧)市内には貧民の爲めに大なる治療院あり、又寺院内にて土曜日曜の慈善的診察を施行致し居る所も數々有之候(中畧)尙渡米來日淺く見聞淺表に止り候間何れ後日改めて詳しく御報仕る可く候(后畧)

\* \* \* \* \*

會告

○寄贈及交換書目

(五月廿四日迄領收ノ分)

- 廣島衛生醫事月報 三、四、全
- 學士會月報 一九三、全
- 醫事新聞 六八、九、六〇、二、全
- 東京醫事新誌 一三五、二、三、四、五、六、七、八、九、全
- 植物學雜誌 一八〇、二〇四、六、東京植物學會
- 日本眼科學會雜誌 八〇、三、四、全
- 植物學雜誌 自九ノ九迄 至七ノ三〇三 總目錄一冊 東京植物學會
- 大日本耳鼻咽喉科會々報 一〇ノ二、三、全
- 東京醫學雜誌 一八ノ六、七、八、九、全
- 岡山醫學會雜誌 一七〇、二、全
- 獨乙語學雜誌 六〇七、八、全
- 醫海時報 五二、三、四、五、六、七、八、九、全
- 日本醫事週報 四七五、六、八、九、八〇、一、三、全
- 大日本私立衛生會雜誌 二五〇、一、全
- 順天堂醫事研究會雜誌 三七五、六、全
- 治療新報 二五、六、全
- 醫談 九、二、全

發行所



第十全會雜誌第四十四號

大日本私立衛生會雜誌	二五三、	全	會社
藥石新報	五〇〇、一、	全	社
醫海時報	五〇〇、一、二、	全	社
日本醫事週報	四三、四五、	全	社
衛生談話	三六、	全	會社
廣島衛生醫事月報		全	會社
順天堂醫事研究會雜誌	三七、	全	會社
皮膚科及泌尿器科雜誌	四〇二、	全	會社
東京醫事新誌	二三〇、一、	全	會社
公衆醫事	七〇一、	全	會社
岡山醫學會雜誌	一七三、	全	會社
日本眼科學會雜誌	八〇五、	全	會社
獨乙語學雜誌	六〇九、	全	會社
治療新報	二七、	全	會社
北海醫報	四〇三、	全	會社
靜岡縣醫學會々報	九、	全	會社
中外醫事新報	五一、	全	會社
產婆學雜誌	五、	全	會社
日本醫事新誌索引	卅六年分一冊	全	會社
神經學雜誌	三〇三、	全	會社
成醫會月報	二六七、	全	會社
東北醫學會々報	三三、	全	會社

臺灣醫學會雜誌 三、  
增訂版診斷學 后篇 一冊  
全 下平用 彩 君 會

○十全會會費領收

(明治三十七年  
五月廿四日迄)

- 金壹圓 (三十五年度一ヶ年分) 岡本京太郎君
- 金參圓 (自三十六年度五ヶ年分) 高澤甚作君
- 金壹圓 (三十六年度一ヶ年分) 加須屋武留君
- 金五圓 (自三十四年度七ヶ年分) 田中健次君
- 金參圓 (自三十六年度三ヶ年分) 藤井亥之吉君
- 金壹圓 (自三十四年度一ヶ年分) 池田秀雄君
- 金參圓 (自三十六年度三ヶ年分) 武田久米藏君
- 金壹圓 (自三十五年度一ヶ年分) 太田友市君
- 金參圓 (自三十六年度三ヶ年分)

廣告

特別會員にして會費未納の諸君は至急御納  
附相成度此之段及催促候也

十全會會計部



# 日本神經學會規則摘要

本會ハ神經系統及ヒ精神ノ生理的及ビ病理的ノ講究ヲ目的トス○醫師タルト否トヲ問ハズ此目的ヲ賛成スルモノヲ會員トス○入會希望者ハ何時ニテモ其旨事務所ニ申込ムベシ(紹介ヲ要セズ)退會者亦然リ○會費一箇年金二圓ヲ前納スベシ(入會金ヲ要セズ)○當分毎年一回四月總會ヲ開キ演說參觀等ヲ行フ○毎月一回神經學雜誌ヲ發刊シ無代ニテ會員ニ配布ス

## 神經學雜誌

本會雜誌ハ獨リ醫學ノ圈内ニ止ラズ心理學、教育病理學、人類學、社會學、動物學等ニ於テ神經及ヒ精神ニ關係アルヲ網羅シ趣味最モ深ク内容最モ多シ  
本誌ハ原著及ビ實驗例ヲ獨逸文ニ翻譯シ廣ク獨、英、米、伊各國ノ諸雜誌ト交換シ既ニ外國雜誌上ニ轉載セラレタルモノ多シ故ニ其業績ヲ普ク世界各國ニ發表セラレントスル篤學ノ士ハ奮テ御寄稿アリタシ草稿ハ日本文或ハ外國文何レニテモ御勝手タルベシ日本文ナレバ本會ニ於テ之ヲ外國文ニ翻譯ス  
本會雜誌ニ掲載セラレタル論文ハ悉ク外國ノ神經學年報 Jahresbericht über Neurologie und Psychiatric 及ヒ中央神經學雜誌 Neurologisches Centralblattノ業績綜覽内ニモ掲出セラレ、モノトス  
本會ハ毎年吾國ニ於ケル斯學ノ論文及演說等ヲ悉ク網羅シテ神經學年報ヲ編纂シ既ニ其第二卷ヲ發刊セリ故ニ此年報ノミニヨリテ吾國ノ業績ヲ綜覽漏スルハナシ是本邦ニ未曾有ノ舉ナリトス  
本會編輯ノ神經年報ノ好評ヲ博セルハニ定論アリ希望ノ方ハ代價(第一卷廿五錢、第二卷四十錢但二錢郵券代用不苦)相添ヘ至急御申込アルベシ  
本會雜誌ハ每號少クトモ貳千部ヲ刊行シ内國醫學會中殆ント最大多數ノ會員ヲ有シ廣ク内外國ニ配布スルカ故ニ世ニ業績ヲ紹介シ或ハ醫家、藥劑家、醫療器械師、其他企業家等諸般ノ廣告ヲ爲スニ於テ最モ有益ナルベシ  
廣告料ハ一行(五號活字二十二字詰)金十二錢但シ行數回數ニ依リテ割引ス○雜誌見本望ミノ方ハ金二十錢ヲ添ヘ事務所ニ申込マルベシ

東京市小石川區駕籠町

醫科大學精神病學教室內

## 日本神經學會事務所

明治三十七年六月

ドクトル富士川游校訂 帝國圖書館司書太田爲三郎編

# 日本醫事雜誌索引

明治三十六年度  
分發售  
正價金八拾五錢  
郵税金六錢

既刊 ● 明治三十四年度分 正價金七拾錢  
● 明治三十五年度分 正價金四拾錢  
● 郵税金四錢

次刊 ● 明治三十三年度分 本年秋季發行し漸  
次既往に溯りて毎年一冊若くは二冊を追補し遂  
に其大成を期す

本書の各冊一年間日本醫事雜誌に掲載せられたる原著は  
勿論重なる翻譯ものは悉く載せて漏らすと無し若し某の  
件又就て「リテラツル」を搜索せんと欲する時は座右の  
索引を取て引き試むれば之に關する記載は何々の雜誌の  
何々號に在ると一目の下に瞭然たるべし苟も學者たる者  
は必ず一本を備へざるべからず

## 醫事年報社

### 發賣所

東京市本郷區  
龍岡町三十四

### 吐鳳堂書店

電話下谷一六七二番

明治十一年創刊(毎月二回十日・廿五日發行)

## 醫事新聞

一部 金拾五錢 郵税金壹錢  
○ 三ヶ月前金郵稅共金九拾錢  
○ 半ヶ月前金同金壹圓七拾銀  
○ 一ヶ月前金同金三圓三拾錢

本誌ハ每號菊列八十頁ニシテ臨牀講義、原著、寄書、質  
疑、學會、雜誌、抄録等ノ他講話、官報、雜報ノ諸欄アリ  
而シテ 臨牀講義、質疑、診斷實習等ハ本

誌ノ特色 下シテ大ニ讀者諸彦ノ歡迎ヲ辱フス

臨牀的病理問答 質疑欄ノ設備ハ弊誌ノ獨特ナルコトハ  
節田中祐吉君ノ筆ニ成ル本欄ヲ第六百六十三號(六月十日)ヨリ連載  
ベシ蓋シ同君ガ醫學生實地醫家ノ間ニ對シ内科の疾患ニ關スル種々ノ病  
理說ヲ應答セラレタル也

學會 四月東京ニ於テ開會ノ各醫學會演說筆記ハ第六百六十號(日本  
内科學會)○第二回日本内科學會○第六百六十一號(第二回日本  
傳染病研究會)○日本眼科學會大會ノ三號ヲ連載セリ其詳細ナルコトハ  
地ノ雜誌中其比ヲ見ザル所也

治則 十四號ヨリ連載スヘシ

附録 結核療法ハ已ニ完結セシナリテ第 肋膜炎 (フロフェツソ  
ルステンケ  
シグ) ナ獨逸大家最近學說集第六トナシテ毎月一回連載スルコト、ナセ  
氏述)リ故ニ本號ヨリ購讀セラル、其ハ最モ便宜ナルヘシ

見本 依例往復はガキヲ以テ御申込ノ方ニハ 先着一千名 限本年分一冊ヲ呈ス  
定ニ應セズ

### 發行所

### 醫事新聞社

東京市本郷區元町二丁目四十七番地

藥品名	性 狀	醫 治 効 用	用 量 及 用 法
甲 狀 腺	羊ノ甲狀腺ヲ取テ乾燥 越幾斯トナシタルモノ 粉末一弓ハ膠囊百個入 一(一個中〇、一二三錠劑 百個入)一(一個中〇、一 三)ノ三種アリ	其主ヤナルモノヲ擧レ ハバセトナシ病、肥滿 病、甲狀腺腫、粘液水 腫、血友病、鞏皮病、濕 疹、鱗屑疹、重性梅毒、 骨形成微弱、等	〇、一三乃至〇、三ナレ ト實驗者中多量一、〇 以上ヲ用テ著效アリ毫 モ藥品ニ依テ起レル害 ナシト報告セル者アリ
鹽 化 ア ド	高峯丁學博士ニ由テ發 見セラレタル副腎中ノ 有效主成分ニシテ目下 醫藥ニ供セルハ千倍液 ナリ殆ド無色無味ニシ テ膏弓ハ半弓ハ瓶ノ二 種アリ	鼻耳咽喉及眼科等總テ 粘膜面及外皮ノ小手術 ニハ無血ニテ施術スル ヲ得内藏出血ニハ内服 又皮下注射等應用汎シ	外用ニハ一萬倍ヨリ千 倍粘膜面ニハ塗布外皮 ニハ注射ス内臟ノ出血 ニハ千倍溶液二三十分 チ内服シ半乃至一筒ヲ 注射ス
リ ナ リ ン	灰白色ノ粉末ヨシテ高 峰博士ニ由テ發見セラ レタル純正品ナルヲ以 テ効力強ク變質腐敗ノ 憂ナキハ本品ノ特長ナ リ粉末膏弓、半弓、四分 一弓及錠劑ノ兩種アリ	無比ノ澱粉消化藥ニシ テ胃ノ澱粉不消化ヲ治 スルノミナラス慢性下 痢ニ於ケル腸ノ不消化 ニ又著効アリ	〇、五乃至一、〇食事ノ 半ハニ於テ若クハ其直 後ニ一日三回ニ分服ス 多量ニ過ルハ只無用ニ 歸スルノミ敢テ障害ヲ 認メス
タ カ チ ア	美麗ナル雪白色ノ結晶 ニシテ其臭味共ニ龍腦 ニ類シ酒精、依的兒、コ ロ、ホルム、偲里設林 等ニ溶解シ水ニハ僅ニ 添解ス膏弓瓶入ナリ	有力ナル催眠防腐局所 麻酔ノ効ヲ兼有シ殊ニ 惡阻船暈喘息咳嗽胃痛 等ニ賞用ス外用ニハ火 傷其他ノ創傷ニ應用ス	内服ニハ〇、三乃至一、 三局所麻酔ニハ〇、二 乃至〇、五ヲ注射シ外 用ニハ礮酸末ト配伍シ 撤布又ハ溶液トナンテ
ク ロ レ	美麗ナル雪白色ノ結晶 ニシテ其臭味共ニ龍腦 ニ類シ酒精、依的兒、コ ロ、ホルム、偲里設林 等ニ溶解シ水ニハ僅ニ 添解ス膏弓瓶入ナリ	有力ナル催眠防腐局所 麻酔ノ効ヲ兼有シ殊ニ 惡阻船暈喘息咳嗽胃痛 等ニ賞用ス外用ニハ火 傷其他ノ創傷ニ應用ス	内服ニハ〇、三乃至一、 三局所麻酔ニハ〇、二 乃至〇、五ヲ注射シ外 用ニハ礮酸末ト配伍シ 撤布又ハ溶液トナンテ
ト ー ン	美麗ナル雪白色ノ結晶 ニシテ其臭味共ニ龍腦 ニ類シ酒精、依的兒、コ ロ、ホルム、偲里設林 等ニ溶解シ水ニハ僅ニ 添解ス膏弓瓶入ナリ	有力ナル催眠防腐局所 麻酔ノ効ヲ兼有シ殊ニ 惡阻船暈喘息咳嗽胃痛 等ニ賞用ス外用ニハ火 傷其他ノ創傷ニ應用ス	内服ニハ〇、三乃至一、 三局所麻酔ニハ〇、二 乃至〇、五ヲ注射シ外 用ニハ礮酸末ト配伍シ 撤布又ハ溶液トナンテ

東京市日本橋區三共商店鹽原策又南茅場町二番地

<p><b>カス</b> <b>ラダ</b> <b>錠</b></p>	<p><b>糖衣錠結</b> <b>麗阿蘭篤</b></p>	<p><b>グリ</b> <b>スリ</b></p>	<p><b>ン</b> <b>坐</b> <b>藥</b></p>	<p>乾燥越幾斯チ糖衣錠ト ナシタルモノ恰モ基石 形ニシテ直徑一分只糖 衣ノ甘味アルノミ毫モ 苦味ヲ感ゼズ百個人及 五百個人ノ二種アリ (一)錠含量〇、一二二</p>
<p>頗ル緩和ナル下劑ニシテ健胃ノ効アリ常習便秘ノ特效藥ニシテ小骨盤内ノ充血ヲ起サズ故ニ妊婦ニ用テ妨ケナシ</p>	<p>肺及ヒ其他ノ臟器結核ニ費用セラル、ハ記載ノ要ナク又腐敗性嘔吐ニ最ヒ適當ナルコトヲ賞揚セリ</p>	<p>高壓浣腸チ必要トスルモノ、外總テノ便秘ニ費用ス殊ニ妊婦及初生兒ノ排便ニハ必要缺クベカラザルモノトス</p>	<p>古來未曾有ナル催吐劑ニシテ殊ニ神莖性陰萎症ニ効アリ獨リ末梢ニ作用スルノミナラス中樞ニモ作用スト論セリ</p>	
<p>普通ノ便狀ニテ排泄スルニハ三錠乃至五錠軟下ノ目的ニハ五錠乃至七錠ヲ空腹時ニ用ユ</p>	<p>日本局法ニテ一日一、〇チ極量トスレハ實際ニ其數倍チ用ユ腐敗性嘔吐ニハ本錠劑チ一日三回一錠宛チ用ユ</p>	<p>大人及ヒ小兒共ニ坐藥一個チ肛門ニ挿入シ効ヲ奏セサルコトナク反復之チ行フノ必要ナシ</p>	<p>内用ニハ〇、〇〇五乃至〇、〇〇七五注射ニハ〇、〇〇二五乃至〇、〇〇五實驗者ハ尙多量チ用テ著効アリ害ナキヲ報ス</p>	

東京市日本橋區三共商店鹽原又策南茅場町二番地

# ▲廣 告▼

## 同窓懇親會會計

一金九拾圓也

一人壹圓二十錢宛  
七十五人會費總計

內金壹圓貳拾錢也

仲居四人ボチ代

〃金五拾六圓貳拾五錢也

洋食代七十五人分

〃金六圓四拾八錢也

ビール貳ダヌ

〃金拾五圓參拾錢也

酒百五十三本代

〃金壹圓也

館主茶代

〃金壹圓七拾三錢五厘也

葉書切手卷紙

殘金八圓〇參錢五厘

小使等雜費ノ高

明治三十七年五月二十五日

發 起 人

一金八圓〇參錢五厘也 同窓懇親會殘金

右同窓懇親會發起人ヨリ書籍購入費トシテ本部エ寄附相  
成候謹テ會員諸君ニ告ク

明治三十七年五月二十五日 十全會雜誌部

## ▲投稿心得七則▼

- 一 投稿用紙は中折紙を用ひ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし
- 一 端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て没書とす
- 一 誌上匿名を望まらるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし
- 一 一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず
- 一 未完の原稿は採録せず
- 一 原稿採否の權は編輯長にあり
- 一 一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

## 十全會雜誌部

明治三十七年六月 廿 日印刷

明治三十七年六月廿三日發行

編輯兼發行者

石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地  
森 島 彦 夫

印刷者

石川縣金澤市尾張町八十二番地  
宇 野 孝 太 郎

印刷所

同 所  
活 文 堂

發行所 金澤醫學專門學校十全會

電話【六十五番】